

新たな^{さくよう}腊葉(押し葉)標本の発見について

— 頌栄コレクションの中に見つけた室井綽先生の名づけた竹・笹類 —

支倉 千賀子 (東京農業大学農学部植物園)・黒崎 史平 (頌栄短期大学)・
池田 博 (東京大学総合研究博物館)

はじめに

兵庫県生まれの竹博士、室井綽(むろい ひろし, 1914-2012)先生は、たくさんの著作と押し葉標本、そして竹・笹類の学名を残しました。

明治から西洋式の押し葉標本がつくられるようになった日本では、室井先生のような研究者の古い標本は、近年ようやく博物館や大学の標本庫といった組織的な管理のもとに公開されるようになりました。それまで、私たちは、そういった標本がどこにあるのかわからず、見ることも調べることもできなかったのです。

2012年、頌栄短期大学植物標本庫 SH0 からひとはく HY0 に寄贈された25万点の押し葉標本は、「頌栄コレクション」として現在も整理が続いているそうですが、私たちは2015年から2018年にかけてコレクション中の750点に及ぶ竹・笹類の標本を調べる機会に恵まれました。

ここでは、見つかった基準標本などの重要な押し葉標本のうち、60年前に名づけられた竹の変わりだね「カタシボ」標本の発見の経緯をまとめました。

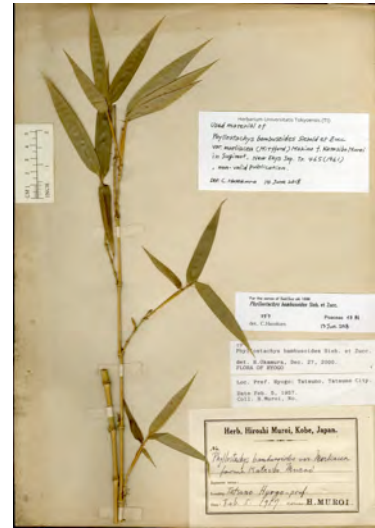


写真1 竹の変わりだね「カタシボ」
の60年前の押し葉標本

室井先生が名づけたカタシボのタイプ(基準)標本かもしれない?

図鑑で調べると標本(写真1)は、マダケという竹になりますが、葉は小さく、厚く、枝に縦のしわのような凸凹があり、普通のマダケではないことに気がきました。そこで、標本についているラベルを詳しく調べることにしました。

注目したのは、印刷された「Herb. Hiroshi Muroi, Kobe, Japan.」と、手書きの「*Phyllostachys bambusoides* var. *Marliacea* forma *Katashibo* Muroi」という学名、採集地である「Tatsuno Hyogo-pref.」、採集日である「Feb. 5. 1957」、そしてスタンプで押された「H. MUROI」という情報です。

繰り返し出てくる人名「Muroi」は竹博士として有名な室井綽先生であることはすぐにわかりました。ラベルを意識すると「日本は神戸の室井綽が収蔵するこの標本(1957年2月5日 兵庫県龍野産)は、マダケの変種シボチクの品種カタシボとして、室井自身が名づけた」といった内容です。

しかし、私たちが調べた、現在使われている竹・笹類の学名のリストにカタシボはありません。標本にある学名が正式に発表されていれば、この標本は学名をつけるもととなった重要なタイプ標本の可能性があります。

カタシボは「片皺」、ほんとのスケッチは何番?—竹博士の思い

1914年に兵庫県赤穂で生まれた室井先生は1938年に盛岡高等農林学校農学部(現 岩手大学農学部)を卒業し、第二神戸中学校(現 兵庫県立兵庫高等学校)の教諭として勤務するかたわら、1956年から富士竹類植物園(静岡県駿東郡長泉町)の初代園長を兼務しました。昭和6年から竹・笹類の標本を採集し始め、盛岡高等農林学校時代は、東北の竹・笹研究の第一人者だった内田繁太郎(1885-1964)

教授のお供をして精力的に標本採集をしたことをその著書（『竹と笹』 室井, 1956）の中に書いています。そして、生涯を通じて竹・笹の研究を続けましたが、竹の知識が社会に普及するように、学術書のほか自然観察の本もたくさん著しました。

そんな本の中に、竹の変わりだねカタシボをクイズにしたものを見つけました（図2）。

1. 竹の稈の表面は外層・中層・内層の三層からなっていて、それぞれの層は通常平滑だが皺性のものがあること、2. 節の中層から枝がわかれてでるが、この時外層が芽（枝）に盗られることで、稈の表面に中層が芽列線（芽溝）として現れる周縁キメラとなること、3. イネ科である竹は一節ごとに周の反対側に芽を付けるといった、竹の本来の性質が重なってカタシボ（片皺）は起こります。つまり稈全面に皺の出るシボチクは外層・中層ともに皺性、カタシボは外層が皺性、中層が平滑性で芽溝部分に平滑性が透けて見えるというのです。したがって正解は③です。

この興味深い竹の性質をどうしても将来へ伝えなかったのでしょうか。その本にはカタシボは兵庫県龍野市にある梅玉旅館の庭で発見され、国の天然記念物として保護されているとも書かれていました。まさに「龍野」は私たちが見つけたカタシボの標本の採集地でした。

そして、1956年に、たまたま梅玉旅館を訪れた室井先生が古くから稈の片方だけに皺が出て珍重されてきたカタシボを庭で発見し、その後調査を重ね、1958年（昭和33年）5月15日に国の天然記念物に指定された（蒔田明史、1999）ということもわかりました。私たちが発見した標本（1957年2月5日採集）は、おそらく天然記念物指定のための調査の時のものと推定されました。

カタシボの基準標本は室井先生の本の中にあった

変わりだねの竹の多くは栽培されているものの、自然から出たもので、研究のための学名を持たないことを気にかけていた室井先生は、カタシボの学名について3つの重要な著作を残しました。

まず、1956年に出版した『竹と笹』のp. 115に学名 *Phyllostachys bambusoides* var. *marliacea* f. *katasibo* Muroi とカタシボの図を發表しました。しかし、これには学名の正式発表のために必要なラテン語の記載がありませんでした。

次いで1961年に在野の植物学者として有名な静岡の杉本順一が出版した『日本樹木総検索誌』のp. 465に、室井先生命名の新品種として学名とラテン語の記載文を發表しました。残念なことに、基準標本の指定がなかったため、またしても正式な学名発表と認められませんでした。この本は日本に生育する樹木のほとんどが載っていて、多くの研究者が参照したので、これまでカタシボの学名は正式発表されていないということが定説になっていたようでした。

そして、1962年に出版した『有用竹類図説』のp. 162では、1961年の発表を引用したうえで三度（みたたび）カタシボの学名と写真図を發表しました。これで学名、記載文、基準標本（この場合は標本に代わる図）のすべてがそろい、ここでやっと学名は正式発表されました。

カタシボの場合、学名のもととなった基準となる資料は本の中の図であり、私たちの見つけた標本は学名をつけるときに参照した資料のうち、現在までに知られる唯一の植物体標本だったのです。



図2 正しいスケッチは何番？

引用：室井 綽・清水美重子 1995

『続 ほんとの植物観察』, 地人書館.